「仲間の大切さ」

上原中学校　二年一組　松田　紫野

私は、びっくりした。同じクラスの二十人の男子中学生が親から離れて、一週間も一緒に過ごすなんて。

この「ぼくらの七日間戦争」は、中学生たちが河川敷にある工場跡に解放区を作って、七日間立てこもり、体面ばかりを気にする大人たちと戦う話である。「戦う」といっても武器を持って争うわけではなく、大人たちに反抗して、言い争うというものである。私は、彼らはとても勇気があるなと感心した。工場跡に子供たちだけで、それぞれが食糧を持ち寄って過ごすなんて、ずい分思い切ったことをするなと思った。もし、私が友達に「解放区を作って、一緒に過ごそう。」と言われたら、まず、断ると思う。私には、考えられない。なぜなら、私は長くても、三泊四日の合宿にしか行ったことがないので、両親からは、たった三日間しか離れたことがない。多分、情けないと思うけど、ホームシックになって、すぐ帰りたくなってしまいそうだ。しかし、共感するところもあった。この本に出てくる中学生たちは、「勉強しなさい。」とか、「何何しなさい。」とか、いつも命令ばかりしてくる大人たちに腹を立てて、解放区を作った。私もいろいろ親から、「早く、〇〇しなさい。」とか、「これだから、だめなんだよ。」とか、言われる。私もそう言われると、ふてくされることもある。彼らは、大人たちが解放区に来て、自分の子供に

「大丈夫？」と、心配しているのに「大丈夫だよ(怒)もう、あっち行って。」と、反抗した。「その気持ち、わかるなぁ。」と、思った。しかし、冷静に考えてみると、親や先生たちは、彼らのために言ってくれているので、それを受けとめないといけないと思う。また、悪いことをして叱られた場合は、反抗するのではなく、きちんと反省しなければいけない。

解放区生活四日目。事件が起こった。クラスメイトが誘拐されたのだ。それを中学生たちは、自分たちだけで解決し、クラスメイトを救ったのだ。誘拐事件を中学生が解決するなんて、すごい！　私だったら、きっとすぐ、警察に連絡して、大人たちに何とかしてもらおうとしただろう。クラスメイトを自分たちの力で救うという、彼らの行動力にとても感動した。この中学生たちは、クラスメイトをとても大切に思っている。一見、やんちゃな中学生たちだが、とても思いやりがある。私にも学校に大切な友達がいる。いつも相談にのってもらったり、のってあげたりしている。これからも思いやりの心をもって接したい。困った時は、すぐに助けてあげたい。

解放区生活五日目。中学生たちは、校長先生ら三人を解放区に来させて、痛い目に合わすという計画を立てた。迷路を作って、ペンキをつけたり、ガムテープをつけたり……。この中学生たちは、ひどいことをするなと思った。先生方にそんなことまでするなんて。人にケガを負わせるようなことは、どんな理由があっても良くないことだと思った。

解放区生活六日目。三日目から、アイスや西瓜を持ってきてくれた

先生に感謝の気持ちを込めて、解放区から文字が書かれた花火を打ち上げた。「解放区より愛をこめて」と。中学生たちは、「ありがとう」という先生へのメッセージと、「とても楽しかったな」と仲間同士の思いを込めて、花火を打ち上げたのだと思う。私は、このシーンがとても印象に残った。私が彼らといっしょにその場にいたら、水たまりができるくらい泣いてしまいそう。それくらい感動的だった。

解放区生活七日目。解放区に、親、先生、警察が攻撃しに来る。それを知った中学生たちは、なんと！秘密の抜け穴から脱出する。これによって、大人ＶＳ中学生の戦いは、幕を閉じた。私は、この中学生たちは、ずる賢いなと思った。大人たちが真剣に解放区を壊す姿を見ながら、大きな声で笑っていた。私は、彼らに言いたい。「親や先生は、君たちのために言ってくれているんだよ。」「おもしろいからって、いろいろな人に迷惑をかけるようなことは、絶対にしてはだめだよ。」と。

私は、この本を読んで、ここに出てくる中学生は、自分とは全くタイプが違うと思った。それは、私にはできないようなことを大胆にやってのけていたからだ。中には、やってはいけないこともあったが、彼らの行動力は、「石橋をたたいて渡る」タイプの私にとっては、少しうらやましかった。また、自分と同じと思うところは、友達を大切にしているところ。七日間の共同生活やさまざまな事件などを通して、彼らの仲間同士の絆は、さらに深まったと思う。私も学校の友達、サッカーチームの友達など、「仲間」をこれからもずっとずっと大切にしていきたい。